

道徳教育

よりよく生きるための基盤となる道徳性を育む道徳科の授業づくり

— 「考え、議論する道徳」を目指したサポートブックの作成と活用を通して —

(1年次／2年計画)

令和元年度 道徳教育研究グループ専門研究員

角田市立角田中学校 保科 優子 塩竈市立玉川中学校 草刈 誠
名取市立増田小学校 阿部 優子 気仙沼市立面瀬中学校 鳳京 邦彦

指導主事

研究推進第一班 一條 美奈 研究推進第一班 木村 徹之

概 要

本研究では、「考え、議論する道徳」を目指したサポートブックの作成と活用を通して、よりよく生きるための基盤となる道徳性を育む道徳科の授業づくりを提案した。サポートブックの内容は、道徳科用語集、内容項目集、「考え、議論する道徳」のポイント集、学習指導案集である。研究員による授業実践と他教師への意識調査から、サポートブックが道徳科の授業づくりに有効であるかを検証した。その結果、教師の「考え、議論する道徳」に対する理解が深まり、道徳科の授業づくりに対するやりがいが増すという効果が認められた。

<キーワード> 道徳科 道徳性 授業づくり 考え、議論する道徳 サポートブック
用語集 内容項目 重点内容項目 学習指導案

1 主題設定の理由

特別の教科である道徳（以下「道徳科」）の授業を通して、児童生徒によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むことが期待されている。これからの道徳科の授業においては、物事を多面的・多角的に考えさせたり、自己の生き方についての考えを深めさせたりするなど「考え、議論する道徳」を実現していかなければならない。

宮城県（以下「本県」）では道徳教育推進教師が中心となり、道徳教育の充実に取り組んでいる。平成30年7月に宮城県道徳教育推進協議会が実施した調査の自由記述には「『考え、議論する道徳』を実現するための道徳科の指導方法が分からない」「道徳科の授業改善を具体的にどのように進めてよいのかが分からない」という回答が複数あり、本県の道徳科の授業づくりについて課題があると考えられる。

そこで、「考え、議論する道徳」を目指したサポートブックの作成と活用を通して、よりよく生きるための基盤となる道徳性を育む道徳科の授業づくりを提案したいと考え、本主題を設定した。

2 主題・副題について

2.1 「よりよく生きる」について

よりよく生きるについて、本研究では、相互に関連を持つ以下の4つの視点で捉えた。

- (1) 自己の長所に気付き、短所を受け止め、個性を伸ばしていくこと。
- (2) 相手の立場を尊重し、望ましい人間関係を築いていくこと。
- (3) 集団生活の中で自己有用感を見いだしたり、お互いに助け合って生活していきたりすること。
- (4) 自他の生命を大切にしたり、人間としての生きがいを見いだしたりすること。

2. 2 「道德性」について

小・中学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編（平成29年告示，以下「解説」）では，道德性とは「人間としてよりよく生きようとする人格的特性」と示されている。また，道德性を構成する諸様相として「道德的判断力，道德的心情，道德の実践意欲と態度」が示され，これらの諸様相には序列や段階がないこと，内面的資質であることが記されている。

2. 3 「授業づくり」について

授業づくりについて，本研究では，以下の4点と捉えた。

- (1) ねらいの設定
- (2) 学習指導過程
- (3) 指導方法
- (4) 児童生徒の評価

2. 4 「考え，議論する道德」について （）内は中学校学習指導要領解説の文言

「考え，議論する道德」とは，「主体的・対話的で深い学び」を実現する道德科の授業のことである。「解説」には，道德科の目標として「よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため，道德的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え，自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して，道德的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる」と示されている。

「自己を見つめ」とは，道德的課題について，問題意識を持ち，教材の登場人物の心情や考えを自分との関わり中で考えることと捉えた。「物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え」とは，立場を変えて考えたり，人間としての強さや弱さについて考えたりすることなどと捉えた。「自己の生き方についての考えを深める学習」とは，道德的価値について，これまでの自分を振り返りつつ，これから生きていく上で大切にしたい考えを持ち，納得解¹⁾を得る学習と捉えた。

3 研究の目的と方法

本研究の目的は，「考え，議論する道德」を目指したサポートブックの作成と活用を通して，よりよく生きるための基盤となる道德性を育む道德科の授業づくりを提案することである。研究は，調査研究（5. 1）と開発研究（5. 2）の2つの柱を立てて進めた。

調査研究では，まず，文部科学省「道德教育の抜本的充実に向けて」のアンケートを参考に，本県の教師を対象にした道德科の授業づくりに関する意識調査を行った。結果を分析し，本県の道德科の授業づくりの現状と課題を明らかにした（5. 1. 1）。次に，これまでの優れた実践（文部科学省道德教育アーカイブやみやぎの先人集「未来への架け橋」の実践例等）を分析し，効果的な指導方法について調査した。「解説」に示されている指導の工夫も踏まえ，道德科の授業づくりにつながる内容を「道德科用語集」（5. 1. 2）「内容項目集」（5. 1. 3）「『考え，議論する道德』のポイント集」（5. 1. 4）としてまとめた。

開発研究では，調査研究を基に，「学習指導案集」を作成した（5. 2. 1）。「道德科用語集」「内容項目集」「『考え，議論する道德』のポイント集」「学習指導案集」を「サポートブック」としてまとめた。研究員によるサポートブックの活用や授業実践を通して，サポートブックの内容や活用方法を吟味した（5. 2. 2）。

研究協力校における教師の活用事例と意識調査の結果を基に，研究の有効性について検証した。研究協力校の教師がサポートブックを活用し，授業を実践した（6. 1）。研究協力校の教師を対象とした意識調査を，サポートブック活用前後に行った（6. 2）。

4 研究イメージ図（別紙）

5 研究の実際

5. 1 調査研究

5. 1. 1 本県道德科の授業づくりの現状と課題の分析

文部科学省「道德教育の抜本的充実に向けて」では、道德科の授業の実施状況の受け止めについて「十分に実施できていないと思う」という回答が小学校教師で66％、中学校教師で75％であることが示されている。本研究でも、平成31年4月24日（水）に、宮城県総合教育センターで実施された道德教育研修会の参加者に意識調査を行った。意識調査は、道德科の授業の実施状況の受け止め、道德科の授業づくりに対する捉え、指導の工夫、評価の4項目について、選択・記述式で行った。道德科の授業の実施状況の受け止めに関する意識調査の結果と自由記述の主な内容は、図1のとおりである。

調査項目「道德科の指導は十分に行われていると思いますか」について、小学校、中学校教師ともに「十分に行われていないと思う」の回答が50％を超えており、本県においても文部科学省の調査結果と同様の傾向があることが分かった。「十分に行われていないと思う」理由として、「授業づくりの仕方が分からない」「授業づくりの仕方が共有されていない」「児童生徒の考えを深めることができていない」「授業づくりの時間が不足している」などの記述があり、本県道德科の授業づくりの課題が見えてきた。課題を解決するためには、まず、教師一人一人の授業づくりを支援する資料が必要であると考えた。そこで、1単位時間の道德科の授業づくりの際に、「解説」と共に参考のできる資料として「サポートブック」を作成することとした。

5. 1. 2 道德科用語集の作成

道德科には「道德性」や「道德的判断力」等、特有の用語が複数ある。用語の意味の理解が不十分なままに授業づくりを行うと、道德科の指導について表面的な理解にとどまってしまう、「考え、議論する道德」の実現が難しくなってしまう。そこで、道德科の授業づくりを進める上で特に重要だと思われる25の用語の意味について、「解説」を基に分かりやすくまとめ、「道德科用語集」を作成した（図2）。「道德科用語集」は、道德科に関する用語の理解を深め、授業づくりが充実することを目的として作成した。

5. 1. 3 内容項目集の作成

道德科で指導すべき内容を示した内容項目は、児童生徒の発達段階に応じて、小学校低学年で19、中学年で20、高学年で22、中学校で22項目ある。5. 1. 1の調査結果より、「授業づくりの時間が不足している」という現状から、内容項目についての理解が曖昧なままに指導したり、教師個人の経験による偏った価値観等から指導したりすることが懸念される。道德科の授業づくりにおいては、内容項目の正しい理解の基に、授業で取り扱う道德的価値について、児童生徒にどのようなことが身に付きつつあり、どのようなことが課題として残されているのかを明らかにして、授業のねらいを設定しなければならない。

そこで、以下の（1）、（2）の内容をまとめ、「内容項目集」を作成した。「内容項目集」は、授業のねらいを明確にし、教師の価値観の押し付けにならない、発達段階に応じた適切な指導が展開されることを目的として作成した。

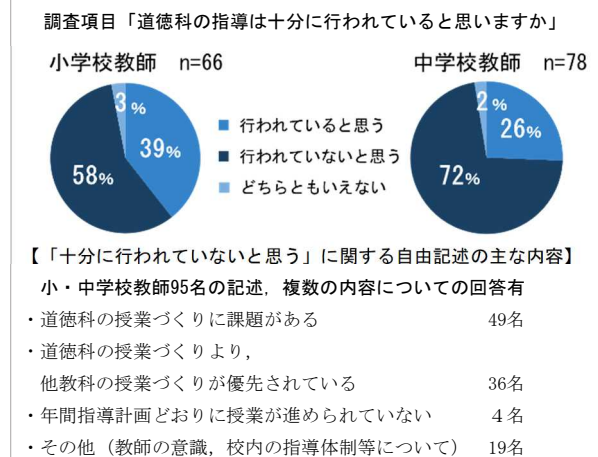


図1 道德科の授業の実施状況の受け止めに関する調査結果と自由記述の主な内容

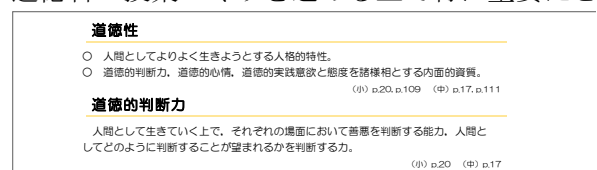


図2 道德科用語集（一部抜粋）

5. 2 開発研究

5. 2. 1 学習指導案集の作成

道德科の授業は、基本的に学級担任が行うことが多く、同じ教材の授業を同年度内で複数回実践することは、ほとんどない。これは、1つの授業について、実践を通して発問を吟味したり、授業の展開を変えたりするなど、授業改善に取り組む機会が少ないということである。そこで、授業を実践する前に、自身が構想した授業を比較・検討する材料として、参考となる学習指導案があれば、更に授業づくりを充実させることができると考え、「学習指導案集」を作成した。

各学校では、重点的に指導したい内容項目（以下「重点内容項目」）を選択し、内容項目全体の指導を一層効果的に指導している。学習指導案集の内容を検討した結果、多くの学校が重点内容項目として選択している内容項目を中心に、学習指導案を作成することにした。そこで、令和元年6月18日（火）に宮城県庁で実施された豊かな心を育む道德授業づくり研修会の参加者（各校道德教育推進教師等）に、各校の重点内容項目の調査を行った。調査結果を表にまとめた（表1）。

表1 重点内容項目調査結果（上位のみ抜粋）

① 小学校（n=192）		② 中学校（n=95）	
内容項目	選択した学校	内容項目	選択した学校
親切、思いやり	79.1%	思いやり、感謝	62.1%
生命の尊さ	52.1%	自主、自律、自由と責任	54.7%
善悪の判断、自律、自由と責任	37.0%	よりよい学校生活、集団生活の充実	37.9%
規則の尊重	31.3%	生命の尊さ	36.8%
希望と勇気、努力と強い意志	30.2%	向上心、個性の伸長	27.4%

表1の内容項目を中心に学習指導案を作成した。「学習指導案集」は「『考え、議論する道德』のポイント集」の内容をより具体化し、道德科の授業づくりの理解を深めてもらうことや教師が構想した授業を比較・検討する材料として活用してもらうことを目的として作成した。以下、「学習指導案集」の内容の詳細について（1）から（5）に述べる。

(1) 2種類の学習指導案を作成

児童生徒の実態によって、育てたい道德性の諸様相は異なる。例えば、小学校の「親切、思いやり」に関して、以下の表2のようなことが考えられる。

表2 児童の実態と育てたい道德性の諸様相との関係の例

	児童の実態	育てたい道德性の諸様相
例1	相手の気持ちを考えることなく、何かをしてあげることが親切と捉えている児童が多い。	相手の立場を考えて親切にしようとする道德的判断力を育てる。
例2	親切にすることが大切と分かっているが、なかなか親切にできない児童が多い。	進んで親切にしようとする道德的態度を育てる。

授業のねらいの違いによって学習指導過程は変わるので、1つの教材に対して2種類の学習指導案を作成し、学習指導案集に掲載した。教師が児童生徒の実態と育てたい道德性の諸様相に合わせて、参考となる学習指導案を選ぶことができるようにした。

(2) 活用の用途に合わせた略案と細案の作成

学習指導案の様式には、主に略案と細案がある。教師が略案や細案を授業づくりの参考とする際に、表3のようなメリットとデメリットがあると考えた。

表3 略案や細案を授業づくりの参考とするときのメリットとデメリット

	メリット	デメリット
略案	・短時間で授業の流れをつかむことができる。 ・主な発問を参考にすることができる。	・指導の意図や児童生徒の反応が分からない。 ・発問と発問をつなぐ教師の働き掛けがつかめない。
細案	・主題設定の理由や児童生徒の予想される反応等、授業づくりの詳細を知ることができる。	・読み込むのに時間が掛かる。 ・指導案どおりに授業を進めようとしてしまう。

また、日々の実践の参考にする場合でも、略案の内容では授業の流れをつかみ切れず、細案を用いる場合も考えられる。そこで「学習指導案集」は、1つの教材について略案（授業のねらい、発問構成、板書のみ）（図7）と細案を作成した。

(3) 実践の記録を作成

細案には、研究員の授業実践の記録を添付した（図8）。実践の記録の内容は、児童生徒と教師の発話記録や児童生徒のワークシートの記述、板書の写真等である。事後検討の結果もまとめ、有効だと感じた手立てや反省点を示した。研究員による授業実践の反省点等を実践の記録に示すことで、教師が、学級の実態や実践時期に応じ、学習指導案に自分の考えを取り入れて、授業を実践できるようにした。

(4) 学習指導案の書き方ガイドの作成

研究授業等で、学習指導案を作成する際、道徳科の特質から留意しなければならない点がある。

例えば、児童生徒の評価の視点である。「～できたか」という評価の視点では、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取る視点が、「できた」「できない」に終始してしまうことが危惧される。「解説」には、「道徳性が養われたか否かは、容易に判断できるものではない」と示されており、「～できたか」という評価の視点は適切ではないと考える。そこで、評価の視点は、「～しようとしていたか」と示し、教師が児童生徒の様子を学習過程の中で見取ることができるようにした。

また、道徳科には道徳教育の要として「補充・深化・統合」という役割がある。例えば「補充」の役割について、「解説」では「各教科等で行う道徳教育としては取り扱う機会が十分でない内容項目に関わる指導を補うこと」と示されている。立てを設け、教師が道徳教育の要としての道徳科た。

以上のような内容を学習指導案の書き方ガイドとしてまとめた（図9）。学習指導案の書き方ガイドは、教師が道徳科の特質を踏まえた学習指導案の作成に取り組めるようにすることを目的として作成した。

【学習指導過程】			考え議論する道徳 ポイント集
段階	学習活動	○主な発問（◎中心発問）	
導入	1 本のねらいとする道徳的価値について問題意識を持つ。 いじめに関する新聞記事を取り上げ、いじめの深刻な問題であることを確 認する。		導入の工夫
	2 課題をつかむ。	いじめをなくするためには、どのような考えが必要か。	問題解決的な学習
展開	3 いじめをなくするために必要なことについて考える。 ○ 女の子が担任に一度いじめのことを言わなかったのは、どうしてだと思 いますか。 ○ 女の子は、いじめの加害者に対して、どのような気持ちを持っていたの でしょうか。 ○ いじめられている女の子が「おめでとう」と声を掛けしたのは、どうして だと思いますか。 ◎ 卒業文集の最後の一頁には、女の子のどのような思いが込められているの でしょうか。		多面的・多角的
終末	4 自己の生き方について考える。 ○ あなたは小学校の卒業文集にどのような内容を書きましたか。 再度の卒業生による卒業文集を読んで考えてみましょう。 【スラッシュ・ジャーナルで甲斐度や卒業生の卒業文集を参照】 ○ いじめをなくするためにはどのような考えが必要か自分の考えを書きまし ょう。		自分との関わり 終末の工夫

【書き計画】

第○回 道徳 「卒業文集最後の一言」

新聞記事

押捺
いじめられて
いる女子

→

押捺
いじめられて
いる女子

押捺
いじめている
児童たち

→

押捺
いじめた
児童

「いじめをなくするためには、どのような考えが必要か。」

・具体化する
・意味がない
・読めない

・嫌だ
・怖い
・やめてほしい

・押捺
いじめている
児童たち

・軽く考えていた
・カニガキが
ばりなように
に死んだ

↓

◎心の痛みを考える
いじめのつらい気持ち
押しやめる
いじめの被害者になり
勇気やいじめを止
める勇気を持つ

図7 学習指導案集 略案

9 実践の記録（○成果 ●課題）
【板書】

いじめについて、多面的・多角的に考えることができるように、いじめる被害者と加害者の立場を図式化した。

いじめ加害者に対する恐怖心と友達になれないという思いを比較できるように、矢印の上下に表現した。

(1) 導入
生徒はいじめに関する問題意識を持たせるために、いじめのニュースを取り上げた。
いじめは、小学校年代の問題ではなく、社会に出た後も向き合っていくなくてはならないものであるという意識を、導入で生徒に持たせたいと考えた。そこで、いじめに関する２つのニュースをスライドで紹介した。１つ目は、中学生のいじめに関するニュースである。２つ目は、職場トラブルの上位がいじめというニュースである。

図8 実践の記録

【評価】

✓解説 (小) p107-116 (中) p109-118
 ポイント集「道徳科の評価」【指導要録と通知表における道徳科の評価の違い】

- ・児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取る視点を記述する。
- ・「できた」「できない」と評価するものではないので、語尾は「～することができたか」ではなく、「～しようとしていたか」や「～に気づいていたか」等の表現にすると良い。

例) 「 」について、 を通して、 しようとしていた。
 (道徳的価値) (指導の工夫) に気づいていたか。等

他の教育活動との関連

✓解説 (小) p89.90 (中) p88.89 ポイント集「他の教育活動との関連」

- ・年間指導計画や別業を基に、本時の授業と前後の道徳科の授業との関連や他の教育との関連について記述する。図等を用いる場合もある。

補充・深化・統合の視点【 】

✓解説 (小) p89.90 (中) p88.89 ポイント集「他の教育活動との関連」

- ・授業のねらいとする道徳的価値が、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の「補充・深化・統合」のどれに位置付けられるのかについて記述する。

図9 学習指導案集の書き方ガイド

(5) 学年、内容項目別教材・資料一覧

授業で取り扱う教材は教科書が中心だが、児童生徒の実態や指導する内容項目によっては、教科書以外の教材が必要になる場合もあると考えた。そこで、文部科学省発行「私たちの道徳」や宮城県教育委員会発行「みやぎの先人集『未来への架け橋』」等、教科書以外の教材・資料を学年、内容項目別に整理し、教師が検索しやすい一覧が必要と考え、学年、内容項目別教材・資料一覧を作成した(図10)。

5. 2. 2 授業実践

5. 2. 1 で作成した学習指導案を用いて、研究員による授業実践を行った。授業実践の目的は、「『考え、議論する道徳』のポイント集」の内容の吟味である。令和元年7月から10月までの期間で授業実践を18回行った。「『考え、議論する道徳』のポイント集」の内容の吟味について、小学校6学年の児童を対象にした授業実践を例として、以下に述べる。

内容項目は「規則の尊重」、教材は「ピアノの音が・・・」(新しい道徳6 東京書籍)の授業を実践した。教材のあらすじは、図11のとおりである。

「『考え、議論する道徳』のポイント集」から4つのポイントを取り入れた授業を考えた(表4)。以下、「『考え、議論する道徳』のポイント集」の内容と児童の様子の詳細を(1)から(4)にまとめた。

表4 授業実践に活用した「『考え、議論する道徳』のポイント集」と活用した意図

「考え、議論する道徳」のポイント集	活用した意図
1 児童生徒の実態把握	授業のねらいとする道徳的価値についての児童の実態を把握する。
2 教師の明確な意図	「内容項目の理解」「児童生徒の実態把握」「教材の活用」から指導の方向性を持つ。
3 問題解決的な学習	考える必然性のある問題を提示し、問題を解決するために必要な道徳的価値について、主体的に考えさせる。
4 道徳的行為に関する体験的な学習	登場人物の心情に共感させ、役割演技の根拠となっている道徳的価値について考えさせる。

(1) 児童生徒の実態把握について

道徳科における児童生徒の実態把握とは、授業のねらいとする道徳的価値についての児童生徒の実態を把握することである。児童生徒の実態把握が不十分なままに授業を行うと、分かり切ったことを答えさせるような授業になってしまうことがある。平成28年7月22日に開かれた道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議(以下「専門家会議」)で示された「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告)」では、道徳的価値に根ざした児童生徒の問題として、以下の4点が報告された。

- ① 道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題
- ② 道徳的諸価値について理解が不十分又は誤解していることから生じる問題
- ③ 道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうできない自分との葛藤から生じる問題
- ④ 複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題

上記の4点を基に、授業を実践する学級の児童の実態を把握してみたところ、授業のねらいとする道徳的価値について、自他の権利を大切にすることは理解しているが、休み時間に騒がしくして

図10 学年、内容項目別教材・資料一覧(一部抜粋)

④ 学年、内容項目別教材・資料一覧(小学校・中学校)			
学年、内容項目別教材・資料一覧は、『東京書籍 新しい道徳3・4』の2、3「これから一年間で学ぶこと」を参考に、 「みやぎの先人集」(未来への架け橋)第1巻、第2巻)や文部科学省「道徳教育アーカイブ」で紹介されている教材・資料を整理し、作成した。 ※ 文部科学省「道徳教育アーカイブ」で掲載されている教材・資料について 「みやぎの先人集」(未来への架け橋)第1巻 → 「わ」 → 中学校道徳 読本資料集 → 「読む物」・実践事例 → 「事例」			
内容項目	東京書籍 新しい道徳3・4	東京書籍 新しい道徳3・4	文部科学省 道徳教育アーカイブ
(1) 道徳の基礎、道徳、道徳と生活	・この道徳 ・新しい道徳	・道徳教育 ・道徳と生活	・みやぎの先人集 第1巻、第2巻
(2) 正義、誠実	・道徳の基礎 ・道徳と生活	・道徳教育 ・道徳と生活	・みやぎの先人集 第1巻、第2巻
(3) 正義、誠実	・道徳の基礎 ・道徳と生活	・道徳教育 ・道徳と生活	・みやぎの先人集 第1巻、第2巻
(4) 道徳の基礎	・道徳の基礎 ・道徳と生活	・道徳教育 ・道徳と生活	・みやぎの先人集 第1巻、第2巻

図10 学年、内容項目別教材・資料一覧(一部抜粋)

マンションで起きたピアノによる騒音トラブルの話。ピアノを弾く女性に対して、男性から「ピアノの音がうるさい。静かに生活する権利があるから裁判を起こす」という苦情が寄せられる。2人はトラブルの解決に向けて話し合う。

図11 教材「ピアノの音が・・・」のあらすじ

周囲に迷惑を掛けてしまうなど、道德的価値の実現に難しさがあるという③に関わる問題が把握できた。児童の実態から、授業で育てたい道德性の諸様相を道德的実践意欲と態度に設定し、発問を構成した。授業実践後の児童の道德ノートには「僕は人の意見を聞かず、自分の考えを言い過ぎてしまうときがあるので、そこを直した方がいいのかなと思いました」という記述があった。この児童の考えは、専門家会議で示された③の問題を解決しようとする考えと捉えることができる。児童の実態から育てたい道德性の諸様相を設定し、発問を構成することで、道德的価値に根ざした問題を解決しようとする児童の考えを引き出すことができることが分かった。

研究員による授業実践を基に、「『考え、議論する道德』のポイント集」の「児童生徒の実態把握」の内容を吟味した結果、専門家会議で示された道德的価値に根ざした4つの問題と実態把握の例を記載することとした(図12)。

(2) 教師の明確な意図について

教師の明確な意図とは児童生徒に考えさせたい内容を明らかにした指導の方向性のことである。教師の明確な意図を持たない授業では、ペア学習や話し合い等、活動自体が目的となってしまう、道德性を育む授業にならないことがある。本時では、教師の明確な意図を持つための3つの要素「内容項目の理解」「児童の実態把握」「教材の活用」から「自他の権利を大切にすることを中心に、関連する複数の道德的価値についても考えさせるなど、多面的・多角的に考えさせる学習を通して道德的実践意欲と態度を育てる」ことを教師の明確な意図とした(表5)。

表5 教師の明確な意図を持つための3つの要素について

	内 容
内容項目の理解	「解説」に示されている「法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切に、義務を果たすこと」の中で、自他の権利を大切にすることについて指導する。
児童の実態把握	自他の権利を大切にすることを理解はしているものの、道德的価値の実現に課題がある。
教材の活用	自他の権利を大切にすることと関連する複数の道德的価値について考えさせることができる教材。

授業実践では、児童から「相手を思いやる気持ち」「お互いを気遣うこと」「素直にお互いの気持ちを話すこと」等、登場人物の心情や行為の根拠について多様な考えが出された。教師が児童の考えを、自他の権利を大切にすることと関連付けることで、多面的・多角的に考えさせることができた。

研究員による授業実践を基にして、「『考え、議論する道德』のポイント集」の「教師の明確な意図」の内容を吟味した結果、教材や児童生徒の実態が変わっても、教師が明確な意図を持つことができるよう「内容項目の理解」「児童生徒の実態把握」「教材の活用」と教師の明確な意図の関係を示した図を挿入することにした。

(3) 問題解決的な学習について

児童生徒にとって考える必然性のある問題を授業で取り扱うことは、他教科同様、道德科の授業においても大切である。本時の導入では、児童の実態把握を基に、児童にとって身近な休み時間の過ごし方を取り上げ、休み時間に生じるトラブル(ぶつかる、うるさい等)から「自他の権利を大切にするために必要なものは何か」という問題を設定した。問題解決に必要な考えに気付かせるための中心発問は「2人を解決に向かわせたものは何か」と設定した。

導入において、児童から「休み時間は自由に過ごしてよい権利がある」「走って人にぶつかったり、うるさくして周りに迷惑を掛けたりしているときがある」「自由だけど、人に迷惑を掛けるの

専門家会議で例示された4つの問題と実態把握例

- ① 道德的価値が実現されていないことに起因する問題
物を大切にしない、ルールを守らない、わがまま児童生徒が多い。
- ② 道德的価値について理解が不十分または誤解していることから生じる問題
相手の気持ちを考えることなく、何かをしてあげることが親切と捉えている児童生徒が多い。自由だから自分の思うままに行動してよいと捉えている児童生徒が多い。
- ③ 道德的価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでない自分との葛藤から生じる問題
あいさつは大切だと分かっているが、なかなかできない児童生徒が多い。いじめはダメだと分かっているが、公正、公平に消極的な態度の児童生徒が多い。
- ④ 複数の道德的価値の間の対立から生じる問題
友達に間違っていることを正直に伝えた方がよいが、相手のことを考えて黙っていた方がよいか悩み、どのように行動したらよいかわからない児童生徒が多い。

図12 専門家会議で示された道德的価値に根ざした4つの問題と実態把握の例

はよくない」等の考えが出された。自他の権利を大切にすることについて児童それぞれの経験から考えている様子が見られ、授業のねらいとする道德的価値について、児童に問題意識を持たせることができた。また、展開における登場人物の心情を考える場面では、ピアノを弾く女性について、児童から「自分も迷惑を掛けてしまうときもあるはずだから、ピアノを弾く権利はあるけれど、相手に嫌な思いをさせてはいけないと思う」という考えが出された。導入と展開で出された児童の考えを比較すると、導入で児童が持った問題意識が、展開の学習にもつながっていることが分かった(図13)。

導入場面での 児童の考え	① 走って人にぶつかったり、うるさくして周りに迷惑を掛けたりしているときがある。 ② 自由だけど人に迷惑を掛けるのは良くない。
展開場面での 児童の考え	<u>ピアノを弾く女性も迷惑を掛けてしまうときもあるはずだから①、ピアノを弾く権利はあるけれど、相手に嫌な思いをさせてはいけないと思う。②</u>



図13 導入と展開の場面での児童の考えの比較

また、別な児童から「もし自分だったら、自分だけ楽しくても、他の人にとって迷惑なら、ピアノは弾かない」という考えも出された。教材を活用して考える場面でも、児童一人一人が自分のこととして登場人物の心情を考えることができていたことが分かった。

研究員による授業実践を基にして、「『考え、議論する道德』のポイント集」の「問題解決的な学習」の内容を吟味した結果、問題解決的な学習は、学習指導過程全体に関わる内容なので、問題の設定から導入、展開、終末までの流れに沿って説明を入れることにした(図14)。

(4) 道德的行為に関する体験的な学習について

道德的行為に関する体験的な学習(以下「体験的な学習」)は、「解説」に示されている多様な指導方法の1つである。体験的な学習には、役割演技や動作化、劇化や追体験等がある。授業では体験的な学習として、役割演技を取り入れた。役割演技は、教材の登場人物の立場になり、即興で演じることで、登場人物の心情に共感しながら演技の根拠となっている道德的価値についての自覚を促すことができる指導方法である。男性の静かに過ごす権利と女性のピアノを弾く権利について話し合う場面を取り上げ、初めにペアで役割演技をさせた。初めての経験で戸惑う児童も多かったが、学級内の良好な人間関係もあり、どのペアも真剣に演技している様子が見られた。ペアの役割演技後、代表児童が全体の前で役割演技を行った(図15)。演技後の振り返りでは、演じた児童から「相手を否定するような言い方ではなくて、話しやすかった」という「思いやり」に関する感想があった。観衆役の児童からは「問い掛けるように話をしていた」「相手の考えを素直に受け入れていた」等の「相互理解、寛容」に関する感想があった。役割演技と振り返りから、自他の権利を大切にすることに関連する複数の道德的価値への気付きが見られた。

研究員による授業実践を基に、「『考え、議論する道德』のポイント集」の「道德的行為に関する体験的な学習」の内容を吟味した結果、役割演技は、学級内の人間関係に配慮が必要な学習活動

道德的価値に根ざした問題の把握
休み時間、自由に過ごす権利はあることを知っているが、騒々しくすることで静かに本を読みたい友だちの権利を守っていないことは気付いていない。
1. 導入
児童の実態把握を基に、道德的価値に根ざした問題を自覚させる課題を設定する。
お互いの権利を大切にするために、大事な思いや考えは何だろう。
2. 展開
教材の登場人物である女性とおじさんの自他の権利を尊重するために解決する場面を問題解決の場面に設定し、問題を解決するための話し合い等を取り入れる。
発問1「裁判を起こすと言ったおじさんの気持ちを考えよう」
発問2「おじさんにうるさいと言われた女の人の気持ちを考えよう」
発問3「お互いの権利を尊重しながら解決する方法をグループで話し合いましょう」
発問4「二人を解決に向かわせた思いや考えや何か考えよう」
3. 終末
発問5「あなたにとってお互いの権利を大切にするために、大事な思いや考えは何だろう」

図14 問題解決的な学習の説明



図15 役割演技の様子

なので、役割演技の前に「演技をからかわない」「演技の上手い、下手は学習には関係ない」等の留意点を児童生徒に伝えることについて、説明を加えることとした。

6 研究の有効性の検証

6. 1 サポートブック活用事例

研究協力校（小学校3校，中学校4校）の教師にサポートブックの活用を依頼し，サポートブックが「考え，議論する道德」の授業づくりに役立ったかどうかを検証した。令和元年の8月から10月までの期間で，研究協力校から81の活用事例を集めた。さらに，研究員がサポートブックの活用状況や活用場面，感想等について，研究協力校の教師にインタビューを行った。以下，3つの活用事例を基に，サポートブックの有効性の検証について述べる。

(1) 活用事例1 日々の授業実践で活用

研究協力校の教師が，中学校2年生を対象に「学習指導案集」を活用して授業を実践した。内容項目は「よりよい学校生活，集団生活の充実」，授業のねらいは「集団生活の充実に努めることの意義について理解し，集団の中で自分の役割を果たし，集団生活の充実と自己の成長の両方を実現しようとする道德的実践意欲を育てる」である。授業実践後，教師にインタビューを行った。生徒のワークシートへの記述内容（図16）と教師へのインタビューで得られた内容（図17）は，以下のとおりである。

- ・自分が頑張っていることを周りの人が知らなくても，最後まで成し遂げることが大切であることや仲間がいるからこそ頑張れるということが分かった。
- ・嫌なことでも最後までやり遂げることの大切さを学んだ。いつも僕は嫌なことから逃げていたので，これからはしっかりとやっていけたらいいと思った。
- ・どんなにやりたくないことや仕事でも，全力で頑張れば最後にはたくさんのことを得られることが分かった。
- ・どのような形で集団に加わろうと一生懸命に尽力することや義務的に仕事をするのではなく，自主的に行動し，有意義なものにすることが大切だと分かった。

図16 生徒のワークシートへの記述内容（一部抜粋）

これまでの私の授業は，生徒に自分の考えを書かせ，発表させたり，友達の考えをメモさせたりするなど，単調なものだった。今回は，学習指導案集を活用して対話的な授業を意識した。授業中，多くの生徒が「〇〇くんの考えと同じです」と発表し，考えに偏りが見られた場面があった。そこで，学習指導案に記載の問い返しを行った。問い返しによって，生徒から多様な考えが引き出され，授業のねらいに迫ることができた。また，普段，発言が少ない生徒が挙手をし，自分の考えを発表する場面が見られ，嬉しかった。生徒の記述を見ると，問い返しがあるのとないのでは，生徒の考えの深まりが違うと思った。これからの授業づくりでも，問い返しを取り入れた授業を考えていきたい。

図17 教師へのインタビューで得られた内容

教師へのインタビューで得られた内容から，「学習指導案集」に記載した問い返しの例が，授業のねらいに迫る手立てとして効果的であったことを教師が実感している様子がうかがえた。特に，問い返しによって，普段発言が少ない生徒の発言を引き出せたことは，授業づくりに対する教師のやりがいにつながっているようだった。「今後の授業づくりで問い返しを取り入れたい」という発言から，問い返しという新たな授業づくりの視点を持ったことが分かった。

(2) 活用事例2 協働による授業づくりで活用

研究協力校の教師が，小学校1年生を対象にした研究授業を行う際に，サポートブックを活用した。研究授業の事前検討会には，授業を実践する教師の他，同学年教師，研究主任が参加した。研究主任が，以下の①から④の手順で授業づくりについて検討することを提案した。

- ① 「内容項目集」を活用し，指導する内容項目の特質と指導の要点を確認する。
- ② 「『考え，議論する道德』のポイント集」の発問づくり等を活用し，発問を検討する。
- ③ 「『考え，議論する道德』のポイント集」の板書の工夫を活用し，板書事項を検討する。
- ④ 気になるところについて「『考え，議論する道德』のポイント集」を活用し，再検討する。

事前検討会に参加した教師からは「これまでは、それぞれの教師の授業づくりの経験を基に話し合いをしていたが、サポートブックがあることで、授業づくりのポイントを絞って検討することができた」という感想があり、サポートブックが協働による授業づくりの参考資料として役立ったことがうかがえた。

また、授業を実践した教師からは「道德科の授業に苦手意識があったが、授業の進め方が分かってきた。事前検討会で、授業のねらいや発問の設定について検討したことを授業で生かすことができた。児童の記述もこれまでと比べ、ねらいに迫るものになってきた」という感想があった。授業を実践した教師へのインタビューから、道德科の授業づくりに対する理解が深まり、やりがいが増している様子うかがえた。

(3) 活用事例3 校内研修で活用

研究協力校の道德教育推進教師が、初任研校内研修で、「学習指導案集」の学習指導案の書き方ガイドを活用した。道德教育推進教師へのインタビューでは「学習指導案の書き方ガイドは、経験が浅く、道德科の授業づくりに不慣れな初任者にとって役立つ内容だった」という感想があった。指導を受けた初任者へのインタビューでは、「学習指導案の書き方ガイドに記載されていた『1単位時間の授業で育てたい道德性の諸様相は1つとは限らず、複数の様相を育てることも考えられる』という内容(図18)が参考になった。また、評価の視点が、具体的に例示されている点(図19)が分かりやすかった。「解説」や「『考え、議論する道德』のポイント集」のページ番号が学習指導案の書き方ガイドに記載されており、更に詳しく調べたいときに、自分で調べられる点も良かった」という感想もあった。

道德教育推進教師や初任者へのインタビューから、初任層の教師等、道德科の授業づくりの経験が浅い教師にとって、サポートブックが役立つことが分かった。

- (1) ねらい
- ・「～しようとする道德的心情を育てる。」
 - ・「～しようとする道德的判断力を育てる。」
 - ・「～しようとする道德的実践意欲を育てる。」
 - ・「～しようとする道德的態度を育てる。」
- (2) 教材名
- 「○○○○」 (●●●●)
- 教材名 出典
- ☒ ポイント集「ねらいの設定」
- ・道德性の諸様相のどこに焦点を当てて授業をするのかを記述する。
 - ・道德性の諸様相(道德的判断力、道德的心情、道德的実践意欲、道德的態度)は一つ一つが独立しているものではなく、関わり合っている。
 - ・ねらいは、必ず一つの様相とは限らず、複数の様相を育てることも考えられる。

図18 授業のねらいについて

- 【評価】
- ☒ 解説(小) p107-116(中) p109-118
- ポイント集「道德科の評価」「指導要録と通知表における道德科の評価の違い」
- ・児童生徒の学習状況や道德性に係る成長の様子を見取る視点を記述する。
 - ・「できた」「できない」と評価するものではないので、語尾は「～することができたか」ではなく、「～しようとしていたか」「～に気付いていたか」等の表現にすると良い。
- 例「」について、を通して、しようとしていた。
- (道德的価値) (指導の工夫) に気付いていたか。等

図19 評価の視点について

(4) サポートブックの有用性に関する意識調査

令和元年10月に、サポートブックを活用した研究協力校の教師48名を対象に、サポートブックの有用性について、4段階で自己評価してもらう調査を実施した。調査結果は、以下のとおりである(図20)。

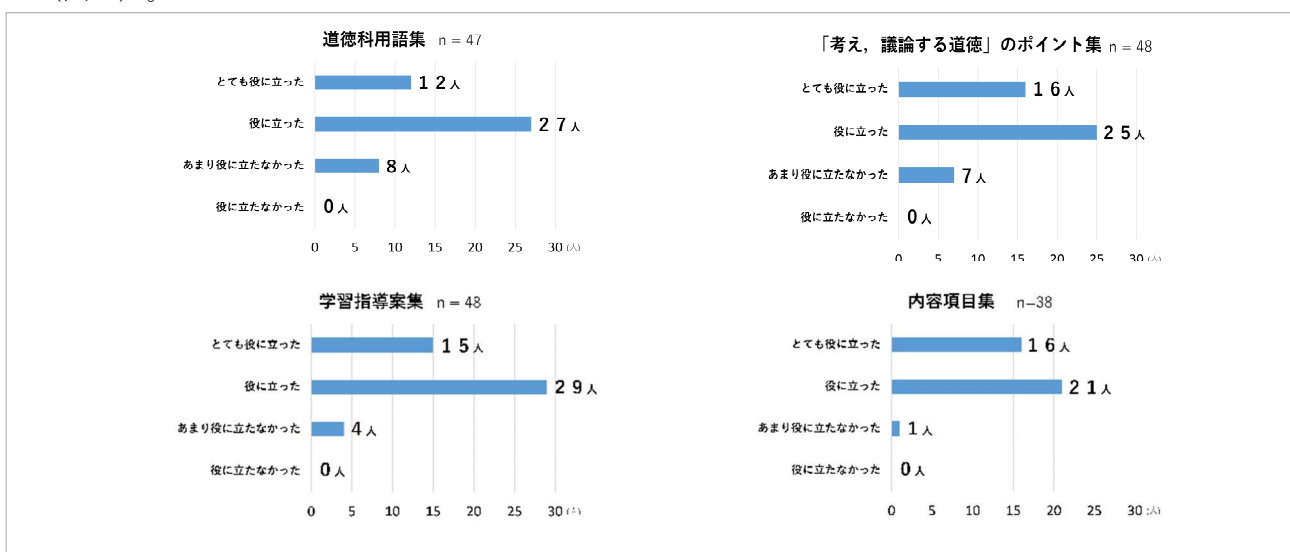


図20 サポートブックの有用性に関する調査結果

サポートブックのそれぞれの内容について半数以上が「とても役に立った」「役に立った」と回答しており、教師がサポートブックに対して有用性を感じていることが読み取れた。「あまり役に

立たなかった」と回答した教師からは、「道德科用語集の内容は、研修会に参加して勉強した内容と重複しており、必要性を感じなかった」「サポートブックの内容が多く、あまり役に立たなかった」という感想等があった。

6. 2 サポートブック活用前後の意識調査 () 内は中学校学習指導要領解説の文言

令和元年の8月と10月に、研究協力校の教師47名を対象に意識調査を行った。「考え、議論する道德」の理解度や道德科の授業づくりに対するやりがいについて、教師が4段階で自己評価した。調査項目は「解説」に示されている「自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習」を参考にしている。サポートブックの活用前後に意識調査を行い、教師の意識の変容を見取ることによってサポートブックの有効性を検証した。以下、(1) から (2) に検証の詳細を述べる。

(1) 「考え、議論する道德」の理解度 () 内は中学校学習指導要領解説の文言

「考え、議論する道德」の理解度を「教師の明確な意図を持った授業」「自分との関わりの中で考えさせる学習」「多面的・多角的に考えさせる学習」「自己の（人間としての）生き方についての考えを深めさせる学習」の4項目で調査した。意識調査の結果（図21）と教師へのインタビューで得られた内容（図22）は、以下のとおりである。

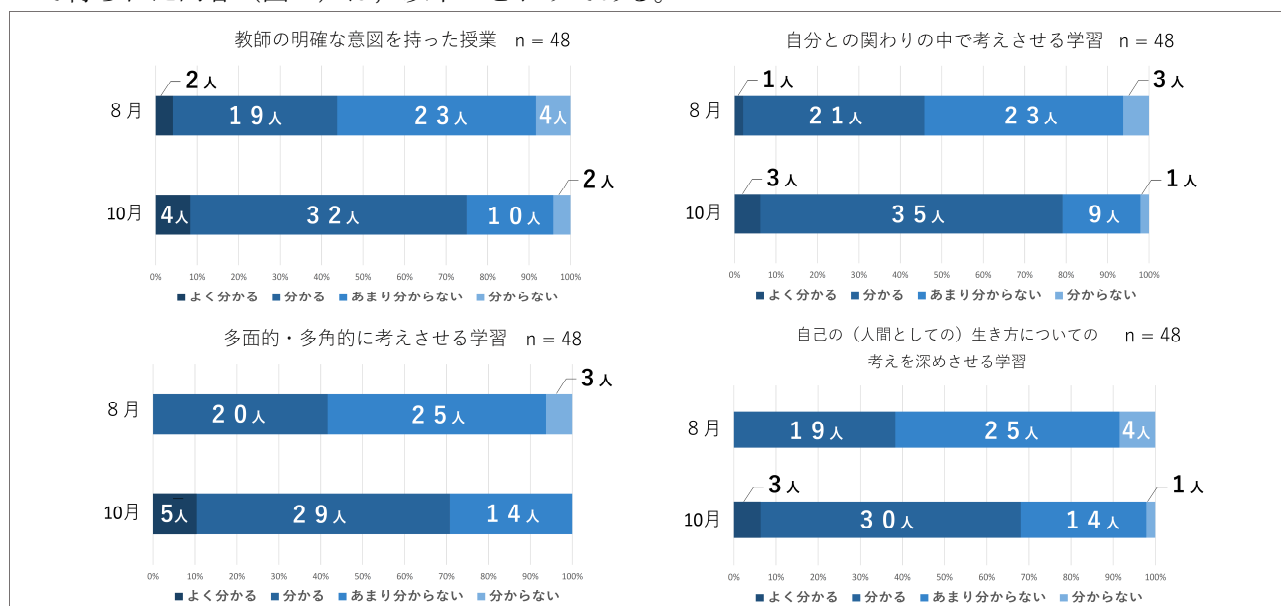


図21 「考え、議論する道德」の理解度に関する意識調査結果

① 教師の明確な意図を持った授業

- ・生徒に何を考えさせたいのかという教師の明確な意図を毎時間意識して授業を実践できた。

② 自分との関わりの中で考えさせる学習

- ・心情円を活用したところ、普段と比べ、生徒が自分の考えを表現することができた。
- ・教材の主人公を自分に置き換えてどれだけ考えを深められるかを考えて授業をするようになった。

③ 多面的・多角的に考えさせる学習

- ・これまでのペアやグループ学習では、生徒に自分の考えを発表させるだけだった。ペアやグループ学習を通して、友達のことを聞きつつ、生徒が自分の考えを深められるように声掛けをするようになった。
- ・教材の挿絵を活用し、登場人物の心情や考えを整理することで、様々な立場で考えさせることができた。

④ 自己の（人間としての）生き方についての考えを深めさせる学習

- ・これまで授業の終末で説話を取り入れていたが、教師の考えを押し付けてしまいそうになる場面もあった。終末に生徒が自分の生き方について、考えをじっくり書くことができるよう時間を確保するようになった。

図22 「考え、議論する道德」の理解度に関する教師へのインタビューで得られた内容（一部抜粋）

意識調査の結果（図21）より、全ての調査項目において、サポートブックの活用後に「考え、議論する道德」に対する教師の理解が深まるという変容が見られた。特に10月の調査結果では、「よ

く分かる」「分かる」の人数が、全ての調査項目で半数を超えており、サポートブックを授業づくりに活用することが「考え、議論する道德」の理解を深める手立てとして有効であることが認められた。

教師へのインタビュー（図22）では「生徒が教材の主人公を自分に置き換えて考えを深められるように意識して指導した」「登場人物の心情や考えを整理して指導し、様々な立場で考えさせることができた」等の指導の工夫に関する回答や「生徒がこれまでより自分の考えを表現できるようになった」等の授業中の児童生徒の様子に関する回答があった。教師がサポートブックの活用を通して、これまでの道德科の授業づくりを見直し、改善を図っている様子が見えた。

(2) 道德科の授業づくりに対するやりがい

教師の道德科の授業づくりに対するやりがいの調査結果は、図23のとおりである。サポートブックの活用後に道德科の授業づくりに対するやりがいが増すという変容が見られた。

「やりがいを感じている」と回答した教師へのインタビューでは「これまでは道德科の授業後に生徒からの反応はほとんどなかった。最近、道德科の授業の翌日、生徒が日記に道德科の授業についてのコメントを書くようになり、改めて道德科の授業づくりについて考えさせられた」という回答があった。生徒の日記には「道德の授業がとても心に残った」「道德の授業で改めて自分と向き合った」「道德では毎回いろいろなことに気付くことができる」と書かれていた。

また、道德教育推進教師へのインタビューでは「サポートブックの内容を読み、これまで道德教育を推進するために、自分が周囲に働き掛けてきた内容が正しかったことを再確認できた。サポートブックを活用し、同僚に発問のアドバイスをしたところ、授業がうまくいったと同僚から感想があり、嬉しかった。改めて道德教育推進教師として、道德科の授業づくりを推進していきたいと思った」という回答があった。

意識調査の結果（図23）や教師へのインタビューで得られた内容から、サポートブックの活用は教師の道德科の授業づくりに対するやりがいを増すことに効果があることが分かった。

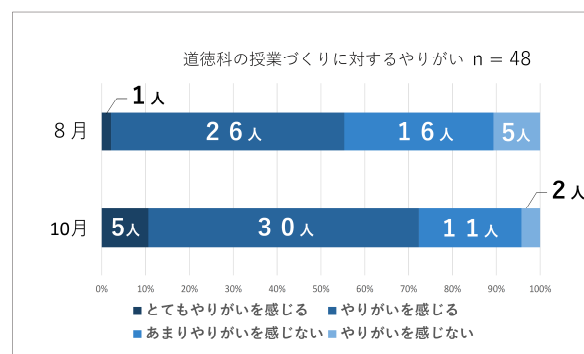


図23 道德科の授業づくりに対するやりがいの調査結果

7 研究のまとめ

本研究では、よりよく生きるための基盤となる道德性を育む道德科の授業づくりを提案するための手立てとして、サポートブックを作成した。研究協力校の教師の活用事例と意識調査を基に、サポートブックの活用を通して、よりよく生きるための基盤となる道德性を育む道德科の授業づくりを提案できたかどうかを検証した。以下に、本研究の成果と今後の課題を述べる。

7. 1 研究の成果

研究協力校の教師の活用事例やインタビューで得られた内容、意識調査の結果から、本研究の成果として、以下の3点が挙げられる。

(1) 6. 1の活用事例の中には、個人だけでなく、協働による道德科の授業づくりでサポートブックを活用した事例があった。また、初任研校内研修や授業検討会でサポートブックを活用した事例もあった。サポートブックを様々な場面で活用した事例があったことから、サポートブックは道德科の授業づくりを幅広く支援する資料であることを確認でき、サポートブックの道德科の授業づくりにおける汎用性の高さが認められた。

(2) 意識調査（図21）では、サポートブックの活用後に、全ての調査項目で教師の「考え、議論する道德」に対する理解が深まるという変容が見られた。研究協力校の活用事例（図22）の中には、教

師がこれまで実践したことのなかった指導の工夫を新たに授業づくりに取り入れた事例も含まれており、サポートブックは、「考え、議論する道德」の理解を深める資料として有効であるだけでなく、授業づくりを更に充実させるための資料としても有効であることが確認された。

- (3) 意識調査（図23）では、道德科の授業づくりに対するやりがいに関して、サポートブックの活用後に、肯定的な回答が半数を超えるという変容が見られた。また、教師へのインタビューでは、児童生徒の学習の様子やノートの記述内容を例として挙げ、道德科の授業づくりに対するやりがいについて話す教師が複数いた。教師へのインタビューを通して、サポートブックの活用により、教師が自身の授業づくりに手応えを感じている様子がうかがえた。また、授業後の指導の振り返りにサポートブックを活用した事例もあったことから、サポートブックを活用することにより、授業づくりのPDCAサイクルに対する教師の意識を高める効果があることも確認された。

7. 2 今後の課題

よりよく生きるための基盤となる道德性を育む道德科の授業づくりを、今後更に推進していくための課題は、以下の3点である。

- (1) 意識調査（図21、図23）から「考え、議論する道德」に対する理解が深まっていない教師や道德科の授業づくりにやりがいを感じていない教師がいることが分かった。「考え、議論する道德」の理解が深まらなかった教師へのインタビューでは「サポートブックの内容を読んだだけでは、『考え、議論する道德』のイメージを持つことができなかった」という回答があった。他にも「考え、議論する道德」に対する理解の深まりが認められた一方、「考え、議論する道德」の実践に至らない事例があることも分かった。例えば、「多面的・多角的に考えさせる学習について理解しているが、どのような発問を設定すればよいか悩んでいる」等の事例である。道德科の授業づくりにやりがいを感じていない教師へのインタビューでは、「サポートブック活用後も児童生徒の考えをうまく引き出せず、授業に手応えがない」という回答があった。サポートブックを活用しても「考え、議論する道德」の授業づくりが推進されない理由は、教師によって様々であることが分かった。そこで、協働による授業づくりを一層推進することで、教師それぞれが抱えている道德科の授業づくりに対する課題を同僚の教師と共有できるようにし、意見交換や授業参観を通して、授業づくりの推進を図っていきたいと考える。協働による授業づくりを充実させるためには、リーダーシップを発揮する教師が必要であり、道德教育推進教師がその役割に適している。道德教育推進教師に対して、サポートブックを活用した校内研修の在り方、授業検討会の持ち方を新たに提案するなど、道德教育推進教師がこれまで以上にリーダーシップを発揮できるような手立てを考えなければならない。
- (2) 教師がサポートブックを活用し、授業づくりを行ったことにより、児童生徒の道德科の授業に対する意識がどのように変容したかについては、更に、調査、研究を進める必要があると考える。「道德科の授業は、自分の今後の生き方に役立つと思うか」「道德科の授業は学ぶ意義があると思うか」等、道德科の授業に対する児童生徒の受け止めに関する調査を行い、意識の変容を見取することで、サポートブックを活用した道德科の授業づくりの有効性について更に検証を進めていく必要がある。
- (3) 「内容項目集」には、各内容項目について、小学校、中学校の発達段階に応じた指導の留意点をまとめたが、高等学校の道德教育に関する内容は含まれていない。令和元年10月11日に参加した宮城県高等学校道德教育研修会では「道德教育全体計画の作成方法について知りたい」「道德教育推進教師として、どのようなことが求められているのかを知りたい」という声が聞かれた。今後は、高等学校における道德教育を推進するために、道德教育推進教師の役割等についても研究を進める必要があると考える。

主な参考文献

- 1) 道德教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議. 「『特別の教科 道德』の指導方法・評価等について（報告）」. 2016, p. 4

図表の許諾について

図15は授業実践の中で児童が活動をしている写真である。児童の写真を掲載することについて、児童の保護者から使用許諾を得た。

研究協力校

名取市立増田小学校

白石市立白川小学校

岩沼市立岩沼小学校

角田市立角田中学校

気仙沼市立面瀬中学校

塩竈市立玉川中学校

多賀城市立東豊中学校

4 研究イメージ図（別紙）

